

---

# 果てしない旅

イーグルテイル・サイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

果てしない旅

### 【Nコード】

N3352C

### 【作者名】

イーグルテイル・サイ

### 【あらすじ】

世界は200年前のデーモンとの大戦で何とか勝利を手にし平和に向かっている。そんな中、帝国から30億という破格の懸賞金をかけられた。竜神族とデニア族のハーフの少年レインが国々を旅するストーリー。いつも金稼ぎを考えているためトラブルに巻き込まれていく。

## プロローグ（前書き）

ドラゴン、魔法、エルフなどのファンタジー系です。

## プロローグ

### 世界観

エルフ、ドワーフ、人間、ホビット、ドラゴン、などの種族があり、今の世界は、200年前のデーモンとの大戦に何とか勝利して平和を取り戻している。

### 主人公

竜神族とデニア族のハーフの少年で歳は210歳。名前はレインで偽名はケイを使いながら国々を旅している。争いを好まないがギャンブルがらみでけんかになる。（イカサマをしているから）

帝国が30億の懸賞金をかけている。（帝国の国家予算の100分の1）

危険度はSSランクで最高危険度。

このせいで、賞金稼ぎから狙われている。

### プロローグ

世界は汚い

この世界を旅するには、3日に1人は殺さないと旅ができない。

相手を殺さなければ、自分が殺される。

相手を信じてはいけない。

たとえばそれが親友でも……………。

これが世界が俺に教えてくれた真実だ。

人を信用してはいけない。

自分が殺されたくなければ、情けはかけない。

こうして俺は旅をしながら何人もの人を殺してきた。  
次の国でも俺は生きるために人を殺すかもしれない。  
だが旅してまわることがつらいわけではない。  
つらい事があれば、楽しいこともある。  
どこかの国のおばあさんがいつていた。  
次の国は、楽しいことがありますように。

国が見えてきた。

夜だからあまり見えないが、広い国のようだ。

入国審査で引っかからなければいいが。

あの国なら新しいナイフが買えるかもしれない。

城壁が見えてきた。

ドラゴンが描かれている。

見とれていると上から優しい声が聞こえてきた。

「ボウヤどうしたんだい？城壁から落ちたのかい？」

上を見ると中年の兵士がいた。

俺は少し大きな声で「旅人です。入国審査所はどこですか？」とたずねた。

兵士は「うそを言うてはいけないよ。今入れてあげ……………」

俺は兵士が言い終わる前に剣を見せた。

兵士は「今門を開ける」と小さな声で言う見えなくなった。

毎度毎度こうだ……………。

俺はため息を付きながら待った。

すると先ほどまで城壁だと思っていたものが消えて城門があった。  
どうやら魔法を使っているらしい。

たいした国だ。

しかしやっと国に入れる。

う  
う  
う

## プロローグ（後書き）

初めてにしてはどうなのでしょう？  
これから日々がんばります。

## 入国審査にて（前書き）

竜神族とデニア族のハーフの少年で歳は210歳。

名前はレインで偽名はケイを使いながら国々を旅している。

争いを好まないがギャンブルがらみでけんかになる。（イカサマをしているから）

帝国が30億の懸賞金をかけている。（帝国の国家予算の100分の1）

危険度はSSランクで最高危険度。

このせいで、賞金稼ぎから狙われている。



## 入国審査にて

門が開かれると第2の門があり、第2の門の前に、先ほどの兵士と入国審査の役人がいた。ずいぶんと太った入国審査の役人だった。

「名前は？」警戒されながら聞かれた。

「ああ、俺はケイだよ。」

俺は偽名をつかった。

賞金首だとばれたら面倒だし

「何歳だ？ 何の目的でこの国にきた？」

210歳と言う訳にもいけないので、

「13歳だよ。後目的は観光で4日とまりたいね。」

「なぜその歳で旅をしている？」

俺はパターン1かそれともパターン2を使うか迷ったがパターン1を使った。

「父と旅していて、2年前に父が病気で死んで、それ以来1人で旅している。」

「そうか」役人は冷たく言った。

入国審査の役人の同情引こうとしたがだめだったか。

内心がっかりしたがまあしょうがないか……。

こんなにだまされやすかったら、入国審査なんて仕事できないか。

「武器は何か？」

「人は何人殺した？」

「金はいくらもっているか？」

「どの位国を回ったか？」

「種族は？」

ほとんどは、でたらめに答えた。

1時間質問攻めされ、夜中の2時ごろになったときやっとこのときがきた。

「終わりだ」

「ホント！」

「ああ、ただし入国するには300ゴールドをだすんだ」  
ぼったくりだ。内心そう思いながら金を出した。

「確かに受け取った。これがパンフレットだ。とまるどころも書いてある。」

「ありがとう」俺は皮肉をこめておれいした。  
眠たそうにしていた兵士が第二の門を開いた。

国の中はきれいに整っていた。

夜中なので人はいないが大きな市場があった。

俺はとにかくパンフレットに書かれてる宿を探すことにした。

Aランク、Bランク、Cランクとあり、Cが一番安かった。

俺はCランクの宿を探した。安さが一番だから。

探し当てるとその宿は大きい個室がたくさんある宿だった。

「まあまあか・・・」

とつぶやきながら宿に入った。

入り口は大きな宿にしては狭かった。

扉を開けるとカウンターの小人が起きて甲高い声で言った。

「お泊りですか？」

「ああ、いくらだ？」俺がたずねるとこびとは

「100ゴールドです」

いがいとやすいな。

「4日とまるから400ゴールドでいいか？」

俺が金貨を渡すと再び甲高いこえで

「はい！お客様は34号室でございます」

小人はキーをカウンターに出した。

俺はキーを無言でとると部屋をさがした。

しばらくすると見つけた。

鍵を差込ドアを開けると中は小さな部屋だった。窓は一つしかない。  
鍵を閉めて、ベツトで眠ることにした。  
今日は疲れた。

入国審査にて（後書き）

疲れるものなんです。小説を書くとは……。

## エルフと老魔法使い

「ドカン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

いつもなら、朝の鳥の声で起きるはずの俺が今日は爆発音という聞きなれない音で目覚めた。

まだ日が昇ったばかりだった。

「隕石でも落ちたのか？」とありえない独り言をいいながらドアを開けて部屋を出た。

部屋を出ると同じ宿に泊まっているやつらが出てきた。

何十人もいる。

大体は人間だがエルフが1人いた。どうやら女性らしい。

さらに驚くべきことに、おれの隣の部屋に泊まっていたようだ。

みな眠そうな顔をしている。

エルフは別だが。

「なんだったんだ今の音？」1人の人間の女性が言った。

「おれの考えでは、ドラゴンじゃないか？」薄汚れたマツチヨの人間が言った。

「この国の近くにドラゴンがいるときいたよ。」

「いや、ドラゴンと契約しているからそれはないだろう」

「ひとまず、外に出てみてはいかがかな？」

一人の老人の言葉で全員が静まった。

おそらく魔法使いだろう。

「何がおきてるか分かる最速の道だと思うぞ。ただし急がずにな、出口はとても狭いからのう」

俺は、出口には行かず部屋に戻った。

そして武器のナイフと金を確認して、部屋の窓から外に出た。

出るとそこは空き地で、だった。

ドサ！

音がしたほうを見ると先ほどの魔法使いがいた。

「おやおや、ずいぶんと賢いですな」と笑っていた。

おれが「あなたのおかげですよ。出口は、とても、狭いといってくれましたから」

「あの出口は狭いですがとてもはいりませんかね」

「ところであなたの名前は？」俺は尋ねた。

「わしは、人間の魔法使いのレイレンド・ラットじゃよ。ラットでよいぞ。」

「俺はケイだよ。」

互いの自己紹介が終わった。

「さておぬしの名前も聞こうか？」

俺の後ろから、きれいな声が聞こえてきた。

「エルフのガゼルです。よろしく」

後ろを見ると先ほどのエルフがいた。

どうやら軽やかに着地したようだ。

「こんにちは、ラットさんケイさん」

んちよつと待てよ声と名前からして

「もしかして男？」

エルフが笑いながらいった。

「はい、よく間違えられますねケイさん」

「とりあえず市場の方に行きましょう。」ガゼルが提案した。

「そうだねガゼルさん」俺が同意した。

「ガゼルでいいですよ」

こうしてエルフと魔法使いと少年という奇妙なチームが市場に向かった。

市場につくと人間が大勢いた。

エルフと魔法使いと少年という奇妙なチームはかなりの視線をあびた。

魔法使いのラットが「どうやらモンスターの襲撃じゃないようじゃないのう」

「確かに夜見た市場と変わらない」ガゼルがいった  
「どうやら1度二人は市場を見たようだ。」

「ラットとガゼルはいつこの国に？俺は昨日の深夜なんだけど？」

「わしは昨日の朝じゃよ、ケイ」

「私は昨日の夕方に」

ラットが切り出した。

「食事をせんかあのみせで、朝食を食ってないじゃろう？」

俺が「賛成だよ俺は！」

「そうですね。でわ」ガゼルが店のドアを開けた。

店の中はがらがらだった。

まあこんな早朝だからなそれに、爆発音で混乱しているんだろう。  
食事はうまかった。

三人ともパンと牛乳だった。

ここ最近、携帯食料ばかり食べていたのでありがたかった。

ガゼルがラットにいった。

「ラット武器屋をしないか？剣が欲しいんだ」

俺が聞いた。「腰にいいのさげてんじゃん、なぜ？」

ガゼルが「これは折れてしまっただけ」

ラットが「その剣見せてくれんか？」

「どうぞ」とガゼルは、剣をテーブルの上に出した。

ラットがその剣を抜いてみると、剣は半分の所で折れてなくなっていた。

「これほどの剣が折れるとは、どのような敵にあったのじゃ？」

確かに俺も気になった。

この剣は、ドワーフの魔法で強化されている。

そう簡単には折れないはずなのだ。

「デーモンに出会ってしまっただね」ガゼルが落ち込みながらいった。

「デーモンに会うなんてついてないね。俺1度も会ったことないよ」ラットが不思議そうにいった。

「たしかにの、わしもここ100年ぐらい会ってないぞ。なぜ今頃・  
・・・・」

全員が考え込んだ。

「おっとイカンイカン話がづれたの。わしが案内しようぞ。ケイはどうする？」

俺は少し考え、「俺は携帯食料量を買いたいから市場に行くよ」と言い。

金を置いて、店を出た。

ラットがつぶやいた。

「金ぐらいわしが払うのにお」

ガゼルは、下を向きながら考え込んでいた。

「ガゼルいったい何を考えているのだ？」

ガゼルが「ケイのことです。彼もしかしたら・・・・」

「もしかしたら何なのじゃ？」

ガゼルは思い切っていった。

「伝説の賞金首 セバルト・レイ 何では？」

「何じゃと!! ああ30億の？彼は何百年も前の時代の人だ」

ラットには、とても信じられないのであろう。

しかしガゼルはうなずいた。

「彼を170年前見たことがあります。」

「170年前？しかし彼はどう見ても13歳ぐらいじゃぞ」

「セバルト・レイは人間ではないと聞きます。たぶんデーモンなのでは？」

「ふうむ。ところで150年前のどこで見たのじゃ？」



「あれは、デーモンの残党がたくさんいたころの話です」

そのときケイは、カジノに向かっていった。（買い物するって言ったのに）

ラットとガゼルが自分の正体を知ったとは夢にも思わずに。

続く

## エルフと老魔法使い（後書き）

やっと書き終わりました。

恐らく書き間違いがあるので、よければ教えてください。メールで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3352c/>

---

果てしない旅

2010年10月9日19時07分発行